

永遠平和の試論(抄)

國威正臣

鷹山顕忠

この論稿は、「永遠平和の試論」の中核をなす「二重維新理論」を明らかにし、日本を起点とする「二重維新運動」とそれを中核とする「永遠平和前提体制構築運動」の始まりを宣言するものである。

以上がこの論稿全体の一通りの要約であり、以下理論の展開の予備作業を始めるにあたり、そこで紹介された理念その他の解説ということをする事ができる。ここでまずは「二重維新理論」という言葉についてだが、「維新(うまれかわり Renaissance)」という用法については、当座「革命」という代わりに敢えて選ばれた表現であるということをおくとして、ここでは「二重」の内訳と関係性ということを理解しよう。結論から言うと、「二重」の内訳は「大共和政維新」と「緑の維新」であり、両者の関係は基本的に「大共和政(大共和主義)」と「緑の保守主義」の関係に準じるものであるから、その関係の説明も、そのために必要な最小限の定義を加えながら、大共和政と緑の保守主義の関係性の説明を通して行うことができる。

さて「大共和政」とは、その制度的基軸に複数の派生的な理論を併せて具象し、いわばそれらの本体にあたる所の混合政体のことであり、「大共和主義」とは、実際の使い分けは微妙だが、とくに大共和政の制度論を中心とした自立した体系を、その他の依存的な理論から切り離し、単一の名目としての性格を強調するための用語である。だが、実現に際しては、これら複数の理論は不可分であり、大共和政はその他の名目の本体であり、それらに優越した名目という関係にある。そして、その他の名目というのが、具体的には逆説的平和主義、普遍的実存主義、そして緑の保守主義であり、したがってこの限りでは、大共和政と緑の保守主義は本体と派生の関係にある。だが、そもそも緑の保守主義は、大共和政への取り込みと独立した維新の理路を備えており、理論展開によつて明らかになるように、一方では逆に大共和政が緑の保守主義に、ということは大共和政維新が緑の維新に還元されるという関係にさえあり、この理論上の双壁という関係性を反映した表現こそが「二重維新」という用語に他ならない。

(続)